

『生産×人材育成×ブランディング』 有機農業で拓く、次の100年への道



「顔が見える農業」
から
「取組が見える農業」へ

大塚ファーム4代目の大塚裕樹さん

きっかけ

- ◆ 大塚裕樹さんは、100年以上続く農家の4代目として家業を継ぎました。新たな事業として、有機農業による多彩な野菜の生産にとどまらず、加工・販売、農福連携、人材育成まで、幅広い取組を一体的に進めています。
- ◆ その有機農業への転機は、20歳の頃に農薬アレルギーを発症したことがきっかけでした。「安心・安全な農産物を届けたい」という信念のもと、北海道でいち早くオーガニック農業の確立に取り組んできました。

取組内容

- ◆ 大塚ファームでは、ミニトマト・さつまいも・大根など多彩な有機野菜を栽培し、干し芋や切り干し大根をはじめ、多くの商品に加工し自ら販売まで手掛けています。有機JAS・ノウフクJAS・GLOBALG.A.P.など**複数の第三者認証を取得し「取組が見える農業」を実践しています。**
- ◆ 商品づくりでは、品質だけでなくパッケージデザインや価格設定、売場での見え方にもこだわります。「有機ほし甘いも」では、デザイン刷新を機に販売数が大きく伸びるなど、ブランディングにより経営が強くなる手応えを実感しています。

今後の展望

- ◆ 大塚ファームのテーマは、「はじまって100年。そして200年へ。」です。商品に「3人のご子息」をデザインしたロゴを表示し、次世代へ有機野菜を届け続ける覚悟と、消費者の皆様による買い支えが、後継者育成につながる仕組みを体現しています。ご子息たちは、国内外で多様な経験を積み、次世代への承継は着実に進んでいます。
- ◆ 「生産・人材育成・ブランディング、この三つを同時に進めることで経営は強くなる」——そう大塚さんは語ります。100年の歩みを礎に、次の100年へ挑戦は続いています。



有限会社大塚ファーム

- ◆所在地
北海道石狩郡
新篠津村
- ◆取組内容
 - ・有機農業による多彩な野菜の生産
 - ・有機JAS、ノウフクJAS、GLOBALG.A.P.の取得
 - ・障がい者の自立を支援する農福連携の取組
- ◆お話を伺った方
代表取締役社長
大塚 裕樹
- ・2004年 第1回コープさっぽろ農業賞を受賞
- ・2014年 第43回日本農業賞 大賞を受賞
- ・2014年 農林水産大臣賞を受賞、他多数受賞



土地に向き合い
育て上げた
多彩な有機野菜



3人のご子息を囲む大塚ご夫妻



商品紹介

◆ セールスポイントは、自社栽培の新鮮な有機野菜を生産者自らが加工する安心感です。看板商品「有機ほし甘いも」をはじめ、トマトジュース・切り干し大根・野菜スープ・ドレッシングなど、多彩な有機野菜の特徴を活かした商品を展開しています。

◆ また、大塚さんが代表を務めるNPO法人「ゆうきの里おおつかふあーむ」が手掛ける「元気！ドッグフード」も人気商品の一つです。障がい者の就労支援と結びついた農福連携の取組が、大塚ファームらしい商品づくりにつながっています。

有機野菜を使用した様々な商品



↑ 農福連携の取組で作られるドッグフード

商品名

「有機トマトジュース」
「有機ほし甘いも」
「有機切り干し大根」
「有機野菜の元気スープ」
「大塚ファームのバジルドレッシング」他多数
「元気！ドッグフード」(※NPO法人生産)



主原料産地

北海道石狩郡新篠津村

原材料

有機野菜全般
(ミニトマト、さつまいも、大根、他多数)

提供可能時期

通年(商品ごとの違いは有り)

販売先

道の駅しんしのつ(産直市場)、
道内食品スーパー、ネット販売、
ネット販売の情報は公式HPから ⇒



自社で加工している「有機ほし甘いも」

6次産業化の歩み

◆ 大塚ファームでは、地元加工業者との連携から商品づくりを本格化させました。「加工はできても販売が難しい」という壁に直面したことで、生産者自身が売り方まで考える重要性に気付き、6次産業化の認定取得へとつながりました。

◆ その後、HACCPの考えを取り入れた自社加工場を整備し、製造・衛生管理体制を強化。生産・加工・販売を一体的に担う経営基盤を築いてきました。商品づくりを通じたブランディングと人材育成の積み重ねが、次の100年への道を支えています。

2026年8月18日取材